



アイヌ語で「広場」の意味
文 北原 モコットウシ 絵 小笠原 小夜



「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

ステファニー・奈々さん(29)

＝会社員、アクセサリーなどのデザイン

— お生まれはどちらですか？

札幌です。勤めている会社も札幌で、事務の仕事をしています。

— アクセサリー作りなどもなさるとか。

はい。細めのワイヤを使ってイヤリングやネックレスを作ったり、女性向けの小物とか紙ぶくろに使えるようなアイヌ民族の文様パターンを作ったり、いろいろ試しているところです。

— とてもきれいですね。お父さんはアメリカの方ですが、アイヌについて知ったのはいつですか。

小学生の時、教科書にアイヌの写真がのっていたんです。とても古い写真で、あまり写りも良なくて、その時は良いイメージを持ってませんでした。母にその話をしたら、「あなたも血を引いているのよ」と言われてびっくりしました。

— その時の気持ちは？

意外すぎて笑っちゃうほどでした。4年生から母が千歳市のアイヌ文化伝承者・中

本ムツ子さんのアイヌ語教室に通い始めて、私もついていけるようになりました。アイヌ語は得意ではなかったけれど、10年ほど通いました。中本さんの人柄にすごくひかれたんです。貴重な経験でした。当時から絵をかくたり物を作ったりするのが好きで、アイヌの文様にも興味がありました。でも、「自分が作っているのかな」という気持ちもありました。

— どうしてでしょう。もっと子供のころから勉強してアイヌについて何でも知っていて、アイヌ語も話せるような人がやることだと思っていたんです。でも、物を作るのは自分のためでもあるんですね。自分が好きな物が増えたらうれしいし、和人に着物が似合うように、きつと私にもアイヌの物は似合う。自分が好きな物をいろんな人に広めたいと思って。ゆくゆくは自分の作った物をかざって、人に見てもらうスペースを千歳市内に作るのが夢です。

■チャランケ(討論)
チャランケとは、裁判のよなものです。何か物をとられた約束を破られた失礼なことをされた、などのトラブルがあり、がまんができない時にはチャランケを申しこみます。そして、当人同士で徹底的に話し合います。相手の言うことに反論できなくなったり、おこつて手を出したり、話のつじつまが合わない場合は負けとなり、負けた人は言葉や品物、

仕事を手伝えるなどの方法でおわびをします。負ければ大変なことになるので、周りの人が見守り、時には仲裁します。トラブルを平和に解決するための手段ですが、スンケチャランケ(うそのチャランケ、イツカチャランケなどという、人に言いがかりをつけることをして物をうばう悪い人)もいます。ですから言葉を勉強しておくことは、自分や人を助けるためでもあるのです。

タンベエエラムアイ?

「きみ、これ知ってる？」の意味

狩りに行って山で会った人に話を聞く若者。あるとき悪い村長のうわさを知った



クスの河口の村長は、頭から血を流しながら「私は大変悪いことをしました。許してください。もうあのようなことはしません」とさげました。やがてチセコロカムイは飛びおり、しばらくはね回ってから宝物のおくへもどっていききました。私は宝物の前に座り、「感謝します。偉大な神であられるので、よくぞ私の言葉を聞きとけ、かえをこらしめてくださいました」と何度もいりました。

それから村長に「おまえの行いがあまりに悪く、遠く私にまで聞こえたのだ。またこのよなことをすればつをあたえるぞ」と言い聞かせました。それから村中に「村長に宝物を取られた者は、持って帰りなさい」と呼びかけました。村人たちが集まり、口々にお礼を言っているのを見ました。川上の長者の家にもとると、そのむすめとの結婚をすすめられました。感謝して一緒に家に帰り、幸せに暮らしました。悪い村長をこらしめたことが伝わったのか、私の村の人たちは私をほめてくれ、まだ若いのですが村長にしてみたら、それからも一生懸命働き、妻の家族とも仲良く子供がたくさん生まれて幸せに暮らしました。と、1人の長者が語りながら長生きしたということでした。

村長が悪事を認めたので、村人たちから取り上げた宝物を返させた



カムイがばつをあたえる

チセコロカムイとは大きなイナウのことで、カムイとして家の中を見守ります。しかし家の者が悪い事をすれば、それを教えるのもカムイの仕事です。そこでイナウが動きだして村長をこらしめたのでした。なお、チセコロカムイは地域によつて形がちがいます。千歳の人々は、地元のイナウを思いうかべながらこの話を聞いたことでしょうから、ここでは千歳市のチセコロカムイをえがきました。

チセコロカムイの怒り

＝千歳市の話

(「白沢ナベ口述 ウエペケレ チセコロカムイの怒り」より)

私はウライウシナイに住む男です。1人暮らしなので、男の仕事も女の仕事も何でも覚えて、自分でおいしい料理を作つて暮らしていました。狩りをして魚をとつても、いつも獲物に恵まれます。1人なので食べきれない分は家の中で干してとっておき、ほかに何を食わたいともほしいとも思わない、満ち足りた暮らしをしていました。狩りに行き、よく山の中であちこちの村の人たちと出かけて話することがありました。あるとき、ほかの村の長者と狩り小屋にとまると話していると、こんなことを聞きました。「私の住むクスル(釧路)には川の河口、中流、上流に三つの村があります。河口の村の村長は困った男で、村人が狩りをしてくとおれの狩り場とつたものだろう」と言つてチャランケ(討論)をし、肉や財産を半分取つてしまします。そして1人裕福になっていますが、私たちは困っているのです」

そこはいつか山で会った長者の家でした。妻やむすめ、息子もいて、とても豊かな様子です。何年かぶりにあいつをして、夜まで話してみたい。あくる日、河口の村まで案内してもらいました。村長の家に通されると、聞いていたとおり家いっぱいに宝物が積み重なって光っています。主人はまともにあいつもしませんが、私はあまりキヨロキヨロせず、話し始めました。口が達者な村長で、私が何か言おうとする、その先にも言う、うで思うように話させません。じつと待つて、間があいたところで「あなたたちは狩りをする、獲物を取り上げ、つぐないとして宝物まで取り上げているが、一体どういつもりかと切り出しました。しかし、村長は悪びれもせずとほけるばかり。そこで「では、あなたがいの神々にチャランケする」といつて、いろいろの神に抗議しました。次に上座に祭られているチセコロカムイ(家の守護神)の前で「家の住人の悪事を見のがして、それでも偉大な神といえるのか。神とも呼べないものは、切りきんでバラバラにして捨てましょ」といりました。するとチセコロカムイが宝物を飛びこえて、いろいろのそばではね回り、主人の頭に飛び上がってつけはけはねました。

悪い村長の家の守り神にのけると、神が動きだして村長をこらしめた

